

14 元宮前分東野

(もとみやまえぶん ひがしや)

15 中野 (なかの)

16 太郎右衛門 (たろうえもん)

堤外地にあり、桶川市と川島町を結ぶ橋が架けられている。

太郎右衛門橋

『風土記稿』には「川越辺へ往来ノ渡津アリ」と記載されている。渡津とは渡船場のことである。

明治10年(1877)頃、人渡し用、馬渡し用の渡船各一艘が配置されていたということである。また、『郡村誌』によると、ここは狭い箇所

で18間(約33m)、広い箇所35間(約64m)、深さ1丈2尺(約3.6m)から3尺(約90cm)あり、緩流(ゆるやかな流れ)で渡しには適していたという。

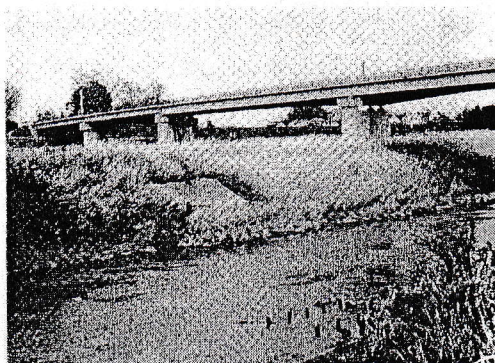
その後冠水橋ができたが、それ以前から洪水時には取り外す橋があったものと思われる。

明治34年(1901)の絵図には5軒の家があり、飲食のできる店もあったという。昭和46年(1971)に現在の橋が完成する前は延長64.5m、幅3mの木造板橋の冠水橋であったが、現在の延長700.5m、幅8.5mの橋が完成することにより、桶川・川島間の交通路が安定した。

橋名になった太郎右衛門については不明のことが多いが、太郎右衛門の末裔の方が大宮に住んでいるというので、お伺いし直接話を聞く機会を得た。そこで次のようなことが分かった。

太郎右衛門の姓は須田といい、須田一族は代々上尾市上平に住んでいたという。本家は酒の醸造業に従事していて、分家である須田太郎右衛門家は代々農業と鍛冶職を営んでいた。広い宅地の北側と西側には掘割があった。太郎右衛門は代々の世襲名で、当主から三代前まで太郎右衛門を名乗っていたということである。

何時頃か分からないが、何代目かの太郎右衛門が荒川の渡しを始め、後に独力で橋をとり、通行料を徴収したと伝えられている。



太郎右衛門橋